

中国報道 1.

『黒龍江日報』 2015.9.12 記者張長紅

日中友好協会大阪府連合会訪問団我が省に到着

日中友好協会大阪府連合会一行 20 人からなる平和友好訪問団は、11 日午後ハルピンに到着した。訪問団は、これから 6 日間にわたって、平和への呼びかけ、黒龍江省における日本軍の侵略戦争事跡視察、中国で犠牲となった国際主義戦士緑川英子慰霊の旅を続けていく。

11 日ハルピン太平飛行場に降り立った訪問団はバスに乗り込んで東北烈士記念館へと向かった。日本侵略軍が黒龍江省で犯した罪行史実を解説する烈士館館員に、一行は真剣に耳を傾けていた。訪問団は最高齢 80 歳から 60 歳代までで構成されている。山本恒人団長は「今年は中国人民にとって抗戦勝利 70 周年、日本にとっても戦後 70 年という重要な節目の年です。ご承知のように、近年日本では右傾化が強まり、侵略という疑いようのない確定された歴史的事実に対して挑戦状をつきつけ、平和を主張する多くの日本人を嘆かせております。今年、7 月 1 日盧溝橋事件記念日の前夜、日中友好協会大阪府連合会は《日中不再戦・平和友好の集い》を開催し、450 名が参加いたしました。ここで参加者は日本の国際主義戦士長谷川テル（緑川英子）女史の事績に学びました。戦時下、テル女史は日本侵略軍に向かって、彼らの中国における暴虐を厳しく批判するとともに、日本人民として戦争には加わらないよう、よびかけた稀有の日本女性です。この度の黒龍江省訪問団の 20 名は、この 7.1 参加者が中心となっています。団の皆さんは、長谷川テル女史の遺児暁子さんと共に、緑川英子女史・劉仁先生の陵墓の前に立って、「日本政府が再び戦争の道を歩むことを決して許さず、平和憲法を徹底的に守り抜く『真の未来志向』を誓うために来たのです」。

ハルピンで幼少時代を過ごした長谷川暁子女史はハルピンには特別の思いがある。東北烈士記念館を参観した際、館から記念刊行本を贈呈された女史は、感激の面持ちで次のように語った。「1990 年中国を離れ日本を定住の地としたが、黒龍江・佳木斯の地に埋葬された両親のことは片時も忘れることはなかった。自分の血の中には日中両国の友好と愛の絆とが交わっています。緑川英子・劉仁の勇氣溢れる国際反戦の行動は日本国民の誇りです。私が日本に向かって後、何度も黒龍江に戻り、佳木斯の良心の陵墓の慰霊を続けてきましたが、そのたびに政府関係機関が心からお世話を下さっております。この度の訪問団との当地訪問は、中国人民の抗日戦争勝利 70 周年というまことに意義深い時期の訪問となりました。私はこの旅が平和を呼びかけ、戦争に反対する象徴

の旅となるよう願っております」。

夕闇も迫る頃、一行は長旅の疲れも厭わず、ハルピン兆麟小学校に向かった。兆麟小学校は日本統治時期には「桃山小学校」と呼ばれており、日本敗戦後ここにはハルピン・日本人被難民収容所が設けられた。このような収容所は当時ハルピンに3、4箇所あり、当時の「桃山小学校」もそのひとつだったという。訪問団団長の山本先生は「日本の中国への侵略戦争は中国におびただしい災禍をもたらしただけでなく、日本の国民にも想像を絶する苦難をもたらしました。このように現地を確認することによって、団一行もいかなる侵略戦争にも反対する決意を一層固めています」と語った。

一行は安重根記念館参観後、方正県「開拓団」公墓慰霊を経て、佳木斯・牡丹江と向かう。